

授業科目	構音障害 I (臨床の基礎)				
担当者	松本 治雄				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

話しことばの3要素である「音声」「構音」「配列」のうち、構音の障害は最も中核をなす障害要因である。言語聴覚士の仕事の大半は構音指導であると言える。講義は言語聴覚士が構音指導上基本として身につけるべき知識、技能を演習的に修得することを目指している。

■ 到達目標

コミュニケーションにおける話しことばの役割を知る。
 構音の概念を理解し、正常構音の産生過程と構音操作を身につける。
 構音障害の概念を理解し障害像を知る。
 構音障害の種類について理解し、その検査、分類、治療方法を知る。

■ 授業計画

- 第1回 障害児音声の聴き取り
- 第2回 日本語音声の成り立ち (母音①)
- 第3回 日本語音声の成り立ち (母音②)
- 第4回 日本語音声の成り立ち (子音①)
- 第5回 日本語音声の成り立ち (子音②)
- 第6回 日本語音声の成り立ち (子音③)
- 第7回 言語障害に関わる要因①
- 第8回 言語障害に関わる要因②
- 第9回 言語障害に関わる検査と分析評価①
- 第10回 言語障害に関わる検査と分析評価②
- 第11回 構音指導の方法①
- 第12回 構音指導の方法②
- 第13回 事例による演習①
- 第14回 事例による演習②
- 第15回 事例による演習③

■ 評価方法

レポートの結果(10%)を筆記試験(90%)に加味して評価する予定

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

- ①日本語音声すべての音の構音操作の理解と自分自身で構音し分ける
- ②発音記号の熟達 (様々な音を聴取して、かな文字のように即座に記述できるよう身体動作として身につける)
- ③原則、毎時間に小テストを実施するので、自己の熟達度を測り100%を達成する

■ 教科書

書 名：改訂 機能性構音障害
 著者名：本間慎治編著
 出版社：建帛社

■ 参考図書

書名：音声表記・音素表記
記号の使い方ハンドブック
著者名：今村 亜子著
出版社：協同医書出版社

■ 留意事項

授業の性格上対面式が望ましいが、状態により遠隔授業もあり得るため、できる限り内容を自分で実行し、身につけることが必要である
新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する可能性がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

臨床役立つよう知識としてだけでなく、身体的な反応としても身につけよう。自転車の練習のように！